

末黒野

すぐろの

1月号

(通巻881号)



萩乱れ

五歩六歩門を出づるや草紅葉
日は雲を脱げり丈なす泡立草
柿の秋土蔵分厚き扉開け
菊の香や白は中天を遊びをり
秋しぐれ古書肆小暗く昼灯し
花野道果つるそこより岬道
杣道とも獣道とも萩乱れ
黄落や杜は風呼び風吐きて

松本三千夫

(名譽主宰)

畦豆

大川に潮の匂ひ秋つばめ
小鳥来る朝の港のカフェテラス
港湾の出船入船秋寒し
木の实踏む野鳥の森の奥の道
山国や庇深きに唐辛子
霧晴れて豁然とある山河かな
畦豆やふところ深き山の影
連山の残すいただき霧の海
静かさや朝日置きたる遠花野
切つ先の揃ふ藁屋根冬支度
荒草に音して雨や秋の果

黒滝志麻子

(主宰)

蒲の絮

阿夫利嶺へ一刷毛かすれ秋の雲
ト口箱に秋海棠や浜の路地
法師蟬急出立の声残し
あるなしの風にはじけて蒲の絮
山の氣に背を正しけり杜鵑草
掛軸の余白たつぷり今日の菊
残る日に香をふくらませ金木犀
秩父なる一番札所初紅葉
朝霧や秩父盆地をすつぽりと
四代経る相生の松色変へず
秋雨や白文字太き兜太句碑
神杉の秀を際立たせ後の月

森

清

(副主筆)

堯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

良夜

石黒興平

ジョギングに追ひ抜かれたる良夜かな
黒々と鎮守の杜や望の月
一興や名月に雲添ひたれば
二次会を辞して身をおく良夜かな
秋風や昼なほ暗き砂防林
番人は古老一人や下り梁
唐辛子吊るし旧家のたたずまひ
白萩の垂れ箒目なぞりをり
総立ちの保護者の席や運動会
湯宿発花野行馬車日本晴

避雷針

岡野里子

赤い風車ぎいと厄日の港町
虎口めく雲や吐き出す今日の月
霧笛橋はや夕影の酔芙蓉
野仏の顔めく月や棟方忌
鉦叩反故捨てをれば夜の更けて
人影にさ走る魚影鳳仙花
手に触るる湿りの灰と芒の穂
耳鳴りかかはた風音か水引草
秋の声漫ろに聞きぬ闇の底
鳥渡る浮棧橋の避雷針



今日の月

菅野日出子

教会のステンドグラス秋夕焼
寝室の窓を占むるや今日の月
ベッドより望む名月寝惜しめり
耳覆ふニユースばかりや鴉の糞
友よりの絵手紙にじむ秋徼雨
客待ちの人力車夫や秋の雷
毬栗を踏みて蹠のたよりなき
秋霖や煉瓦色濃き絹倉庫
水澄むや小鷺のねらふ稚魚の群
六地蔵の傍にて香り花臭木

台風禍

田中臥石

青刈の捨てられし稲田へ戻す
一昼夜粃乾燥の匂ひかな
新米を出荷捨て値の二等米
腎臓を病めり青山水澄めり
延命の処置は不要と賜猛る
また台風避難せよとの子の電話
台風来つつあり暁闇の耳澄ます
家捨てて避難口惜し月隠れ
八十余歳生きて腎病む草紅葉
窓を透く鶏頭夫婦相病めり

行く雲

森清信子

新涼や画廊の木椅子艶めきて
行く雲を堰くものなし芒原
重陽や父の遺品の大硯
秋の虹この世かの世をつなぎけり
薄墨に暮るる山里秋灯
山稜の風に洗はれ星月夜
秋麗や空のまぶしさ弾く湖
山河晴れ心も晴れて豊の秋
銀漢をすつぽりかむり隠岐島
そぞろ寒書斎の本の砦為し

行く秋

安齋久英

水攻めの列島野分の雲迅し
片見月待つや雨来る宵の口
みすずかる信濃出水に遭ふ嘆き
行く秋や風に押さるる雲一朶
襟足をよぎれる風や冷やかに
日の当る安房の稜線秋深み
海峡をタンカーよぎる秋思かな
雲が雲盛り上げてゆく秋の暮
又の名を幾つや畔の彼岸花
よき名悪しき名野を彩れる彼岸花

乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



根 岸 今村千年

鶏頭やかつてこの庭子規のぬて
秋うらら根岸の茶屋の豆腐汁
木 隠れに三重塔 鯛雲
木に穴を開くる構へやけらつつき
幼子が猫をじやらしぬ猫じやらし
秋海棠どこか夢二の女めき
秋時雨妣待つ里へ急がしむ

秋しぐれ 高木邦雄

秋時雨 及川照子

街の灯の映ゆる運河や秋しぐれ
秋の日の古本漁る神田かな
爽涼や八幡平の尾根の径
庄内や目路の果てまで稲の波
たたなづく出羽の山並秋気澄む
どつしりと月山据ゑて豊の秋
秋草の彩競ひたる子規の庭

御殿医の子孫の白衣涼新た
欠落の石仏ぬらす秋時雨
ゆきずりの祠の絵馬や秋の風
鯛雲麒麟の首を遊ばせて
木の実降る宮を高くにいただきて
一人居や楽し楽しと虫の声
新酒酌む声のもれ来る暖簾かな

十六夜

大川暉美

神田川の流れ瘦するや秋旱
駅前の方のコスモス風染めて
一駒を夫と歩くや丹今宵
十六夜きはだつ星を供として
静寂の闇の深さや虫の声
澄む秋の光散らして鯛とべり
深秋やジャズの音色の汽車道に

即位礼正殿の儀

岡田史女

秋気満つ奥の院へと登らねば
寺領へと人誘へり曼珠沙華
即位礼正殿の儀や秋の虹
敗荷の裾や鉄気の沈みをり
一叢は鷹の羽薄揺れとほす
白萩の散りこぼるるや地藏堂
蟋蟀の闇の深さへ寝落ちたり

毒舌

小田嶋野笛

ペガサスを真上や通夜の仄明り
野帰りの道を惑はず秋の蛇
毒舌といふは我が性穴まどひ
吾亦紅尼の庵の朝日和
牛乳を飲むや浅間の霧に咽せ
鯖雲やムー大陸は海の底
喪服干す朝を玄鳥帰りけり

沢桔梗

加藤静江

野分あと雲間の夕日濃かりけり
朽ちかけの小さき木橋や沢桔梗
かすかなる虫の音深くせり静寂
滝までの坂のしめりや初紅葉
乾ききる八つ橋白し秋の雲
秋草や澱みの深き心字池
出揃へる穂の風生れ芒原

虫の宿

齊藤マキ子

灯を消せば野にあるごとし虫の宿
立ち泳ぐさまに分け入り芒原
まだ何も釣れずバケツに鯛雲
大江戸の絵地図見てゐる夜長かな
鉄棒に三つの高さ小鳥来る
屋根修理釣瓶落しの風のなか
気持よく転がつてをり芋の露

石 榴 塚 昌 子

石榴食べ身近に想ふ母のこと
歩道まで声はすれども昼の虫
天と地と海の果てまで秋澄める
土手ひろげ紅燃ゆる曼珠沙華
木々そよぎ深まる山気鴉の声
秋空や真つ直ぐつづく高速道
秋晴れや煉瓦倉庫の人の群れ



青炎集

黒滝志麻子選



横浜 布施由岐子

本棚の縦横斜め正す秋

長き夜の雨垂れ拍子五更まで
壊れゆく吾と折り合へず罅雲
それぞれの時を刻むや木々の秋
闇のなき空広ごれる無月かな
ピアノに酔ひ銀杏に醒む上野の夜

横浜 太田良一

切株に残る木の香や小鳥来る
隣合ふ山は互に装へり

酔ひの手の馴染む夜空や踊の輪
捨て切れぬ昭和の香り捨扇

秋麗や京の古着の貸衣装

江の島の砂に字を書く秋思かな

横浜 山崎稔子

譲り合ふ小流れの橋水澄めり

光悦寺垣茶室傍への薄紅葉

月あらば一幅の絵や秋の草

淋しさは言はで元氣と曼珠沙華

帆の形のビルの全容天高し

観覧車秋天回る恋幾つ

横浜 上月智子

朝戸風秋の風鈴淀みなく

零余子蔓厨の窓の薄緑

秋茗荷根方を探る夕間暮れ

敬老日おかめひよつとこ撒く笑ひ

童謡の会場に満ち敬老日

台風過欠けし瓦の嵩高く

横浜 山口 登

ゆくりなき添水のひびき四阿に

蛇笏忌や塵払ひつつ読む句集

コンバイン稲穂の波をさつと消し

栗飯や丹波の味のほろほろと

行く秋やゆつくり渡る霧笛橋

ラグビーのトライに酔ふや柿日和

横浜 加瀬 伸子

ト口箱に秋茄子育つ海女の軒

一輪車の少女棒立ち小鳥来る

海峡を一直線の帰燕かな

筑波嶺の背山妹山粧ひ染む

一直線桜紅葉の段葛

晩学や灯火親しむ電子辞書

鎌倉 丸山 千穂子

房総の山並低く雁渡る

廢線のレールを隠し秋桜

雑木山風に任せて烏瓜

刈田道夕日を入れて道祖神

木犀の闇を濃くせり路地の奥

自販機の明り目にしむ秋深し

日野 中村 月代

アポロから早五十年今日の月

かまつかの炎の色に空焼くる

絡みつく裏見葛の葉風の音

雨颱風名だたる河を溢れさせ

台風裡ダムは一気に水吐けり

千切れ雲飛ぶや茜の野分晴

横浜 前川 美智子

秋霖や外出かなはぬト日暮る

山の気を集むる紫紺とりかぶと

龍胆を供花の野仏山日和

貼り替ふる障子や薄ら日のやはら

苑めぐる照葉あかりの茶屋の縁

訪づれる家木犀の道しるべ

大綱白里 岡井 マスミ

復旧の灯またたく虫の夜

灯りゆく高階の灯や虫時雨

風に乗る婚のひちりき空高し

白萩や譲り合ひたる石畳

鐘の音や夕風つる萩の寺

いつしかに初心遠のく水の秋

耕 土 集

森清 堯 選



秋澄むや街を見わたす観覧車

三塔のみつむる未来街は秋

秋天へ鍬入れの鍬地鎮祭

秋天をキャンバスにして白き雲

姿なき風の姿や芒原

横須賀 宮沢久子

地の火照り土手一面の曼珠沙華

百舌鳥の声墨の乾きの速きこと

裏店の栗焼く煙巴里の旅

新米の荷造り確か父の技

ふと会話途切るる間合ひ虫の声

印西 大坂 正

渋滞を作る半鐘秋彼岸

老人会のパン食ひ競争秋暑し

白杖へそつと手を添ふ秋小寒

新しき釜もて炊くや今年米

ちぎりては集めては湯へ菊膳

横浜 中里 昌江

追憶の切れ切れとなり鱗雲

茶座敷や水揚げ遅き蜜草

難聴を忘れ今宵の月見酒

菊月や深み増したる酒の味

秋寒や年金の額細められ

横浜 小長谷 紘

奥付を繰り返し読む夜長かな

佐渡島夕日とどむる実玫瑰

黒光りの秋茄子に指刺されけり

ひとつごとのやつなる顔や敬老日

秋灯ひとの動きに応へけり

新潟 太田チエ子

残り香の会釈の人や秋日傘

房総の復活祈る良夜かな

穏やかなる日々の感謝や桐一葉

山内に知らぬ花あり秋の風

茅葺きの山門脇や彼岸花

横浜 鈴木千恵子